

優勝



**【第27回総理大臣杯】
阪南に2年前のリベンジ！駒大2連覇！**

2連覇をかけて臨んだ大臣杯はまさしく駒大の勝負強さが光った大会となった。1回戦、関西大学に1-0。2回戦筑波大に3-0。準決勝の福岡大には粘り強くPK戦で勝利したが苦戦の連続だった。決勝も先制される苦しい展開。しかし、後半エース赤嶺真吾がヘディングでゴールへ叩き込み同点。駒大にとっては2戦連続のPK戦へ突入する。ここでGK牧野利昭が踏ん張り勝利。勝負どころを心得、ものにしていった駒大が2年連続の優勝を達成した。

ちなみに総理大臣杯優勝によって天皇杯の出場権を獲得したが埼玉代表・ホンダルミノッソ狭山に1回戦で敗れている。

日本代表



**【ユニバーシアード・テグ大会】
中後の決勝弾で日本2連覇達成！**

8月下旬に行われたユニバーシアード・テグ大会。駒大からは中田洋介、田中信成、中後雅喜、原一樹の計4名が選ばれた。日本は原の活躍などもあり1位でグループリーグを突破すると中国、モロッコに苦戦しながらなんとか勝利し決勝まで駒を進める。決勝の相手はイタリア。一進一退の攻防が続く中2-2で迎えたロスタイム。けがで準決勝までプレー出来なかった中後が決勝弾を叩き込み見事優勝。日本はこれで2連覇を達成した。



**【第52回全日本大学サッカー選手権】
決勝で敗れましても3冠ならず**

『大学3冠』。それを合言葉に臨んだ全日本大学サッカー選手権。1回戦で松山大に8-0と完勝するとリーグ戦連覇の実力をいかんなく発揮。駒大は決勝まで17得点1失点という完璧に近い内容で勝ち上がった。決勝の相手は筑波大。試合は前半から駒大がペースを握った。しかし、決定的な場面で決められず逆に一瞬の隙を突かれ筑波大に先制を許してしまう。この1点が最後まで重くのしかかり駒大はまたしても大学3冠の夢を掴み損なってしまった。

優勝



**【第77回関東大学サッカーリーグ】
1節残して2連覇達成！！
無敗優勝はならず…**

「前期はトップに離れず付いていければいい。その間にチームを作り後期に勝負をかけた」と。これは開幕前に秋田監督が語った言葉だ。しかし、監督のプランは良い意味で裏切られる。前期は開幕戦の日大にこそ引き分けたもののその後は1年生の活躍もあり国士大、筑波大を撃破し6勝1分けと最高のスタートをきった。

しかし、中断をはさみ9月から始まった後期リーグ。日大にはまたしても引き分け。順大には勝つものの中大に引き分けるなど勝ちきれない試合が続く。この時点で2位の筑波大に勝ち点2まで詰められてしまう。しかし、「もう1コも落とせない」（中田）なかで臨んだ亜細亜大戦。巻が負傷退場となり不穏な空気になるものの「あれでチームがひとつになった」（原）と言うようにその後、攻撃陣が爆発。3得点を叩き出し上位対決に弾みをつける。

上位対決初戦はタレント軍団・東学大。1-1で迎えたロスタイム。中後の豪快なシュートは東学大のゴールネットへ。「守備が頑張ってくれたからこういう得点が生まれた」（原）、「團結力があつたから2点目がとれた」（田中）というように守備陣の踏ん張りもあり貴重な勝ち点をギリギリで掴んだ。そして勝てば優勝という筑波大戦。一時は同点に追いつかれるも橋本、原、赤嶺のゴールで筑波大を圧倒。2年連続の優勝を1試合残して決めてしまった。最終戦の国士大戦に負け、無敗優勝とはならなかったがあらためて駒大の強さを感じるリーグ戦となった。

【第82回高校サッカー選手権】

期待の新生生がそのポテンシャルを発揮

この年に全国大会にでられた選手は丸岡の山内達夫（左）、東平大祐（右から2番目）、前橋育英高校の小林竜樹（右）、成立高校の鳥井勇作（左から2番目）。丸岡は3回戦でこの大会、準優勝した筑陽学園に敗れるものの東平は4得点の活躍。山内も2回戦の福島東戦で印象的なプレーを見せた。優勝候補とみられていた小林率いる前育はまさかの1回戦敗退。東京都予選で帝京をやぶった成立は3回戦岐阜工と対戦。鳥井の2得点で2-0と一時リードするもその後7失点を喫して全国の舞台から姿を消した。



香川



**【第79回関東大学サッカーリーグ】
上位陣から勝ち点をあげられず
リーグ3連覇はならず**

ここ5年間、開幕戦で白星をあげていない駒大は今年、またしても新星・流経大に敗れ黒星発進となった。しかし、2節以降はルーキーの活躍もあり順調に白星をあげていく。が、上位陣の国士大戦、筑波大戦と連敗を喫し3位で前期を折り返す。

「首位との勝ち点差5」で迎えた後期。優勝するためにはもう後がない駒大。しかし、第12節・流経大戦でまさかの逆転負け。「試合終了5分前までリードしていたのに…。あの試合で勝てていれば（優勝の）自信はあったのだが」と試合後、秋田監督が語ったように2試合で首位との勝ち点差「5」はいくら逆境に強い駒大にも痛すぎる敗戦だった。この時点で自力優勝が消滅。そして、続く筑波大戦で敗戦し、この瞬間史上5校目の三連覇の夢は儚くも消え去った。

連敗も途絶え、新たな時代を迎えた駒大。これからは本当に『チャレンジャー』として戦わなくてはならない。だが、いつの時代も駒大はそうして歴史を築いてきた。今季味わった悔しさが『最強』へのきっかけとなることを期待したい。

昨年、初戦敗退と不本意な結果で終えたため「今年こそは」を…という気持ちで挑んだ天皇杯。相手は中京大と格下相手も、立ち上がりが悪く波に乗れないまま0-0で前半を折り返す。後半6分先制を許すがその5分後、原のゴールで試合は振り出しへ。しかし、試合終了間際。相手CKからヘディングで押し込まれ逆転を許してしまう（写真）。その後相手ゴールに迫るも得点できずタイムアップ。昨年同様、初戦敗退と早すぎた幕切れ。打倒Jの夢はまたも来年へと繰り越された。



**【第84回天皇杯】
またしてもJとの対戦はならず
打倒Jは今年もおあずけ…**



**【第28回総理大臣杯】
決勝戦、桃山相手に5得点！
前人未到の大臣杯3連覇**

1回戦から危なげなく勝ち進んだ駒大は準決勝、関東選手権で0-3と完敗を喫した明大と対戦。序盤から攻勢をしかけた駒大は18分に原が先制ゴール。50分にも原が見事な個人技から得点し2-1と関東選手権での雪辱を晴らした。決勝は桃山学院大学との対戦。主将・鈴木祐の出場停止など不安材料もあったがその不安は後半一気に解消された。2-2で向かえた後半、原、中後、赤嶺の連続3ゴールで桃山を突き放す。そして、桃山の捨て身の反撃をしのぎ史上初の3連覇を達成。大学サッカー界の歴史にまた駒大の名が刻まれた。

優勝